日本医史学雑誌 第四十二巻第四号 目次

原著

尾張藩薬園の成立と変遷……遠藤 正治……五〇三

カスパル・シャムベルゲルと「カスパル流外科」（下）……ヴォルフガング・ミヒェル……五二一

財団法人・日本医学専門学校の学校騒動と私立東京医学専門学校の独立分離（下）……唐沢 信安……五四七

研究ノート

『元禄世間咄風聞集』所載の医薬学関連の咄……浜田 善利……五六三

広場

キナ伝説の里、チンチョンとチンチョン伯爵夫人……泉 彪之助……五八一

資料

小島宝素著・森立之写『河清寓記』釈読（下）……町 泉寿郎……五八九

池田文書の研究（十五）……池田文書研究会……六〇三

江戸幕府の医療制度に関する史料（八）—鍼科医員佐田・増田・山崎家『官医家譜』など—……香取 俊光……六二五

追悼

宗田一先生の略年譜……長門谷洋治・坂上俊之……六二七

宗田一先生の御逝去を悼む……蒲原 宏……六三〇

宗田一先生を偲ぶ……山中 太木……六三三

思い出の宗田一先生……大塚 恭男……六三五

宗田一先生と日本医史学会……酒井　シヅ……六三七
宗田一先生を悼む……深瀬　泰旦……六三九
宗田一先生と京都の医学史研究……杉立　義一……六四三
医史学者そして名プランナー　宗田一先生……長門谷洋治……六四五

記　事

消　息

大島蘭三郎先生を偲ぶ会の報告……大村　敏郎……六五一

例会抄録

横浜軍陣病院の介抱女……中西　淳朗……六五六
『大同類聚方』の問題点―同撰―について……後藤　志朗……六五七
『医則発揮』の著者河津省庵と門人山川揚庵……石原　昂……六五九
疾病史から見た『傷寒論』……中村　昭……六六〇

紹　介

青柳精一著『診療報酬の歴史』……長門谷洋治……六六三
北海道医史学研究会編『北海道の医療　その歩み』……中西　淳朗……六六四
北里研究所医史研編『『扁鵲倉公列伝』　幻雲注の翻字と研究』……猪飼　祥夫……六六五
日本農書全集第六十巻『畜産・獣医』……坂本　勇……六六七
R・コールダー著／佐久間昭訳『物語・人間の医学史』……中西　淳朗……六六八
杉田絹枝・杉田勇共訳『フーフェラント自伝／医の倫理』……荒井　保男……六七〇
日本医史学雑誌第四十二巻総目次……六七三

≪本号の表紙絵≫

アンブロアズ・パレの形成外科絵図

本誌が発行される頃、12月20日はアンブロアズ・パレ（1510？～1590）の命日である。それともう一つの理由で、パレのいわゆる「カスガイ膏」の絵図を取り上げる。

左は1585年『パレ全集』第4版フランス語版のものである。頬の創を縫う時、直接皮膚に糸を通さずに、2枚の布を創の両側に張りつけ、その布のみを糸針で寄せようという、今日の形成外科的な処置の古典である。

右は1649年オランダ語のスキッペル版『パレ全集』である。針が曲針に変わり、糸の両端に2本の針がついている。この誤りが日本にそのまま受けとめられて広まり、それ故にスキッペル版が日本に最初に伝わった版であることを同定出来たのである。1649年にアムステルダムでは2つの『パレ全集』が出版され、ウイルムス版の方は針が1本である。こんな針の先のようなことから歴史が解明できたのである。

この発表を私がしたのは1985年春の大阪であった。今、適塾にあるこの本をもとに「大阪にあるパレの資料について」と題して報告したが、その時一番喜んで下さったのが宗田一先生であった。先生の追悼特集の表紙に是非と考えた次第である。

（大村 敏郎）